

樹木だより

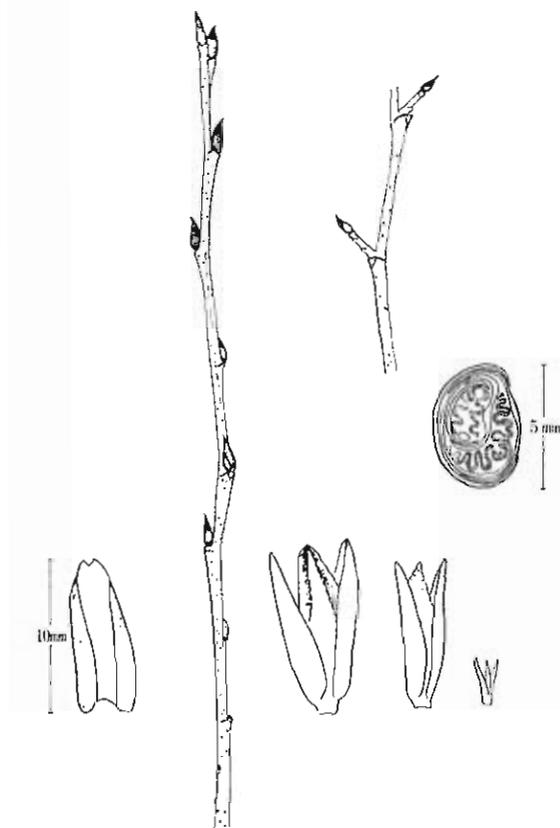
ミヤマハンノキ

—— 枝と冬芽 ——

去年の夏、興部に調査に行ったとき、ウエンシリ岳山麓の、通称氷のトンネルといわれる沢へ連れていってもらった。さして標高は高くはないところなのに、両側の斜面からなだれ落ちた雪が堆積し、谷一面に雪渓がひろがっていた。雪面上にミヤマハンノキが一本、なだれにひきずりおろされたかのように倒れていた。両側の斜面にはタニウツギやミネカエデに混じってミヤマハンノキが点々と生えていた。この木は山地の岩礫地や海岸林などに生育し、防災林用の樹種としても広く用いられている。

冬の枝から芽を切りはなして、外側から順番にほぐしてみる。まず、芽の外側をすっぽりとオーバーのようにくるんでいた芽鱗がはずれてくる。その内側には、2枚の托葉につつまれた葉が、順々に入っている。外側の芽鱗は、対応する葉身が退化してなくなり、托葉だけが残ったものと思われる。このような芽鱗は、ハンノキ属の中でもミヤマハンノキやヒメヤシャブシなどのなかまだけにみられるもので、ハンノキ、ケヤマハンノキなどにはみられない。ミヤマハンノキのなかまが、岩礫地や海岸などのきびしい環境に適応していく過程で獲得してきたものではないかと想像している。

(造林科 菊沢喜八郎)



ミヤマハンノキの図